

テクノロジーと法の未来へ

Vol.30

FACULTY OF
GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で
分析・解明し、解決策を論理的に構築する、iTL独自の学びに迫ります。

はじめに

私が所属する小向ゼミでは、情報法を中心に情報分野の法的問題について各自で研究テーマを設定します。ゼミでは、研究進捗を発表し、メンバーや先生と多角的な視点で議論を交わします。2年生の初期段階では発言がなかなか出にくいものの、4年生になる頃には白熱した議論ができるようになります。また、小向ゼミでは早い段階から研究活動に取り



国際情報学部国際情報学科4年
私立四天王寺高等学校（大阪府）出身

はやし ななこ
林 奈那子

iTLでのクロスオーバーな 学びと2つの研究活動

組み、学会での研究報告も積極的に行っています。私自身も、3年生の9月に情報処理学会で研究報告を行いました。

個人研究

私は個人として、「Google Mapsのクチコミを中心に、デジタルプラットフォーム事業者の投稿に対する法的責任」に関する研究に取り組みました。具体的には、Googleに対してGoogle Mapsのクチコミの投稿削除を求める裁判例を調査し、その特徴を分析しました。

Google Mapsのクチコミは病院や飲食店選びの指標となる一方、誹謗中傷やなりすまし被害をもたらす可能性があります。

デジタルプラットフォーム上で人格権侵害が発生した場合、まず発信者本人に責任を問いますが、匿名性ゆえに特定が難しい場合はプラットフォーム事業者に投稿削除を依頼します。それでも対応が得られない場合、事業者に対する削除請求が裁判で争われた事例もあります。

Google Mapsのクチコミの裁判例を調査した結果、債権者が医師や弁護士といった士業が多いことが特徴的でした。特に医師に対しては、業務の性質上、一定の批判も甘受すべき立場にあると判断されていました。しかしながら、医師は守秘義務があることから、Googleが有用としているクチコミの返信による弁解の機会が得にくいことを鑑みると、厳しい判断だと言えます。

さらに論文では、2024年の5月に成立された情報流通プラットフォーム対処法の動向を追いながら、EUのデジタルサービス法や、アメリカの通信品位法との比較を行いました。研究を通して、日本の媒介者責任の在り方を踏まえた上で、Google Mapsのクチコミの削除請求に関する日本の法的課題を検討しました。

iTLの クロスオーバーな学び方

iTLでの学びには、「情報学」「法学」「国際教養」の3つの軸があります。2年生後期からは、それぞれ



情報ネットワーク法学会での研究報告

に特化したゼミを選択でき、個人が探求したい学問を深められる環境があります。ゼミを横断した研究報告会では、自身の研究に対して学問分野を越えた多角的な視点の助言をいただくことができます。

私は個人研究とは別に、iTLのほかのゼミ生とともに共同研究にも取り組みました。就職活動の経験から高度情報化社会の働き方に興味を持ち、「日本の労働者のウェルビーイング向上推進施策」に関する研究に昇華させました。

実際に、幸福度ランキング1位の



北欧でのフィールドワーク：タンペレでのエキスポ



北欧でのフィールドワーク：共同研究者と

個人研究での学会参加や共同研究でのフィールドワークなど、研究資金が必要だったため、「iTL先端的プロジェクト奨学金」に応募しました。審査の結果、両方の研究に対して支援をいただくことができました。同じ奨学金に2枠で応募する前例がなく、応募前に事務室の方々に相談したところ、迅速に対応いただきました。新設の学部だからこそ「挑戦できる環境」を柔軟に整えてくださったのだと思います。

先端的プロジェクト奨学金

フィンランドでフィールドワークを行ったり、他学部や他大学でウェルビーイングを研究されている先生方に助言をいただいたりしながら、研究を進めていきました。このように、学問分野にとらわれずクロスオーバーな学びへの探求ができるのがiTLの魅力だと思います。

奨学金の支援のおかげで、私は「情報を直接取りに行く」重要性を実感しました。個人研究では学会での報告や聴講参加を通じて、弁護士の方々から実務的な視点での意見をいただくことができました。一方、共同研究ではフィールドワークで交流した人々や電車内の静かさから、フィンランドと日本の似ている部分を感じました。その結果、憧れの国という主観的な意識が薄れ、研究対象国として冷静かつ客観的な視点で分析できるようになりました。また、国内でも外部の大学の先生方や企業の方々と交流し、現場の声を聞ける貴重な機会にも恵まれました。

インターネットで簡単に情報が得られる時代だからこそ、現場の声を直接拾い上げ、得られた情報との誤差を埋めることが重要だと考えています。現場での実務的な声を踏まえながら研究を進められたことで、自

分の研究に対する自信にもつながりました。

最後に

最後になりますが、研究を進める上で切磋琢磨してくれる小向ゼミや共同研究のメンバー、研究を支えてくださった先生方や事務室の方々、調査協力していただいた方々、そし

ていつも熱心に指導してくださる小向先生には心から感謝を伝えたいです。絶対的な正解がないこの時代、自分なりの納得解を得るためにもがいた大学生活は、周りの方々のおかげでつまずきながらも充実したものになりました。今後も、iTLで得た知見や経験を活かして、社会人として邁進していきたいです。